

令和8（2026）年度9月「歳時記」

ながつき がつ やま けはい ながつき がつ やま けはい
長月9月、山の気配がゆるやかに秋へと移ろいはじめます。白露（7日）を迎えると、
あさ くうき す くさは ちい つゆ ひかり やど なつ なごり かん
朝の空気はひんやりと澄み、草葉には小さな露が光を宿します。夏の名残を感じながら
も、季節は確かに次の段階へ歩み始めます。

ことし がつ こよみ なら とくべつ けいろ う ひ にち しゅうぶん ひ にち はさ
今年の9月は、暦の並びが特別です。敬老の日（21日）と、秋分の日（23日）に挟
まれた22日が、祝日法により「国民の休日」となり、前週末からの5連休が生ま
れます。これにより、まち きせい かんこう ひとびと ふ み こ みち えき さんだんきょう
町にも帰省や観光の人々が増える見込みです。道の駅や三段峡など
のめいしょ もにぎわい、あき みかく もと こえ き
の名所にもにぎわい、秋の味覚を求める声があちこちから聞こえてきそうです。

れんきゅうさいしゅうび しゅうぶん ひる よる なが ひと ふしめ ひ ひがなばな あか き
連休最終日の秋分は、昼と夜の長さがほぼ等しくなる節目の日です。彼岸花が赤く咲
き、やま くうき ふか あき かん せんぞ おも はかまい かてい おお
き、山の空気はさらに深まった秋を感じさせます。ご先祖を思い、墓参りをする家庭も多
く見られます。

じゅうごや ちゅうしゅう めいげつ にち ひとびと たの よる やまかげ
十五夜となる中秋の名月（25日）は、人々が楽しみにする夜です。山影がくっきりと
う か しず よそら まる つき のぼ かざ だんご そな かてい おお
浮かぶ静かな夜空に、丸い月が昇ります。すすきを飾り、団子を供えるご家庭も多いので
はないでしょうか。

げしゅん のうか みな いそが じ き いねか ほんかくか そうちよう
下旬は農家の皆さんにとって忙しい時期です。稲刈りが本格化し、早朝からコンバイ
ンのおと やまざと ひび てんこう み さぎよう だんど き ひび あき いとな
ンの音が山里に響きます。天候を見ながら作業の段取りを決める日々は、まさに秋の営み
そのものです。しゅうかく しんまい かお まち おお よろこ はこ
収穫された新米の香りは、町に大きな喜びを運んでくれます。

そして、9月と言えば「秋の七草」。萩・尾花（すすき）・葛・撫子・女郎花・藤袴・
ききよう あき おとす かん にほん だいひょうてき くさばな こらい わ か よ
桔梗、秋の訪れを感じさせる日本の代表的な草花です。これらは古来より和歌にも詠ま
れ、あき ふぜい いとど
秋の風情を彩ってきました。

はくろ はし しゅうぶん む がつ きせつ うつ ひとびと いとな うつく かさ つき
白露に始まり、秋分へ向かう9月は、季節の移ろいと人々の営みが美しく重なる月で
す。この季節は、きせつ しず にぎ こうご おとす ところ ふか よいん のこ
静けさと賑わいが交互に訪れ、心に深い余韻を残してくれます。

<古文>

わたどの とぐち つぼね み い き あさ つゆ お との
渡殿の戸口の局に見出だせば、ほのうち霧りたる朝の露もまだ落ちぬに、殿ありかせた
まいて、い み すいじん め やりみずはらわ う はし みなみ おみなえし じゅうさか ひとえだ
まひて、御隨身召して遣水払はせたまふ。橋の南なる女郎花のいみじう盛りなるを、一枝
お い きちよう うえ のぞ え おん す わ
折らせたまひて、几帳の上よりさし覗かせたまへる御さまの、いとはづかしげなるに、我
があさがお おも い し おそ わ
が朝顔の思ひ知らるれば、「これ、遅くてはわろからむ。」とのたまはするにことつけて、
すすり よ
硯のもとに寄りぬ。

おみなえし いろ つか せ みるからに 露の 分ける 身こそ 知らるれ
「あな、疾。」と 微笑みて、 硯 召し出づ。
しらつゆ わ お おみなえし ころ からに や 色の 染むらむ

<口語（現代語）訳>

わたし ろうか とぐち わたし へ や そと なが きり あさ
渡り廊下の戸口にある私の部屋から外を眺めていると、ほんのり霧がかかっている朝の
つゆ お ころ との ある すいじん よ やりみず てい
露もまだ落ちない頃に、殿がお歩きになって、隨身をお呼びになって遣水の手入れをおさ
せになる。橋の南にある女郎花がたいそう花盛りであるのを、一枝お折りになって、几帳
の上からそっとのぞいてご覧になる様子が、とても気後れするほど立派なのに対して、
わたし あさ ね お かお おち し おみなえし わ か おそ
私の朝の寝起きの顔が思い知らされるので、「この（女郎花の）和歌が、遅くてはよくない
だろう。」と（殿が）おっしゃるのを言い訳にして、（私は）硯のところに近寄った。
あさつゆ うつく そ おみなえし さか いろ み つゆ くべつ
（朝露がついて美しく染まった）女郎花の盛りの色を見たばかりに、露が区別して（つ
かずに美しく染めてくれない）私の身のことが思い知られます。
「ああ、早いなあ。」と微笑んで、硯をお取り寄せになる。
しらつゆ わ へだ はな お おみなえし じぶん うつく
白露が分け隔てをして花に降りているわけではないでしょう。女郎花は自分から美しい
いろ そ 色に染まろうとしているのでしょうか。

こんげつ あき ななくさ ひと おみなえし だいざい さくひん えら ぶんしょう
今月は、秋の七草の一つである「女郎花」を題材にした作品を選びました。この文章
は、へいあんじだい ちゅうき むらさきしきぶ か むらさきしきぶにっき いっせつ かんこう ねん
平安時代中期に紫式部が書いた「紫式部日記」の一節です。寛弘5（1008）年、
ちゅうぐうしやうし しゅっさん ともな むらさきしきぶ ふじわらみちなが ていたく つちみかど の つか ころ
中宮彰子の出産に伴い、紫式部が藤原道長の邸宅である土御門殿に仕えていた頃の
できごと えが ある あさ きり のこ にわ みちなが おみなえし ひとえだ お きちよう こ
出来事が描かれています。ある朝、霧の残る庭で、道長が女郎花を一枝折り、几帳越しに
むらさきしきぶ さ だ ふたり わ か おく あ ばめん
紫式部へ差し出しました。これをきっかけに、二人は和歌を贈り合います。この場面の
みりよく おみなえし あさつゆ うつく しぜん ふうけい とお ふたり じぶん き も ひょうげん
魅力は、女郎花や朝露といった美しい自然の風景を通して、二人が自分の気持ちを表現
しているところにあります。わ か つか たが おち つた あ なか へいあんじだい ひとひと
和歌を使って互いの思いを伝え合う中では、平安時代の人々の
ゆた きょうよう すこ とおまわ ころ と かん うつく あき ふうけい
豊かな教養だけでなく、少し遠回しな心のやり取りも感じられます。美しい秋の風景
と、そこに重ねられた人の心。女郎花を眺めながら、千年以上前の人々が交わした言葉に
おも こてん あじ たの ひと
思いをはせてみるのも、古典を味わう楽しみの一つです。

それでは練習問題です。皆さんぜひチャレンジしてみてください。

＜問題＞

問1 「殿ありかせたまひて、御隨身召して遣水払はせたまふ」とありますが、殿は何をさせたのでしょうか。最も適切なものを選びましょう。

ア 庭の女郎花を摘ませた。 イ 遣水の水をきれいに掃除させた。

ウ 朝露を集めさせた。 エ 几帳を片付けさせた。

問2 「いみじう盛りなる」の「いみじう」の意味として最も適切なものを選びましょう。

ア たいそう イ 少し ウ ひっそりと エ 急いで

問3 「女郎花盛りの色をみるからに露の分きける身こそ知らるれ」とありますが、この歌の作者が感じていることとして最も適切なものを選びましょう。

ア 女郎花の美しさに感動している。

イ 自分だけが露にぬれていることを悲しんでいる。

ウ 女郎花の美しさと比べ、自分の見た目が見劣りすると感じている。

エ 朝露が女郎花を美しく見せていることを喜んでいる。

問4 「白露は分きても置かじ女郎花心からにや色の染むらむ」の歌で、作者は女郎花の色が美しい理由をどのように表現しているか。簡潔に答えなさい。

＜解答例＞

問1 イ 問2 ア 問3 ウ

問4 白露が女郎花を特別に選んで降りたからではなく、女郎花自身の心によって色づいたのではないかと表現している。